

東北太平洋地域サケふ化施設の復旧・復興支援活動? 来春の放流を目指して?

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 二美男 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009806

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



東北太平洋地域サケふ化施設の 復旧・復興支援活動 ～来春の放流を目指して～

業務支援課 伊藤 二美男



来春の放流に向けた東北太平洋地域のサケのふ化施設の復旧のため、被災状況の実態調査を行いました。

2011年3月11日14時46分、未曾有の大震災により、多くの尊い命と共に様々な建物や施設等が失われました。その中には、サケのふ化施設と放流目前のサケ稚魚も含まれていました。水産総合研究センターにおいても、当該地域でサケ増殖技術の普及活動を行っている東北区水産研究所の宮古庁舎が被災しました。

東北地方において秋サケは、漁業のみならず、加工・流通業を含め地域産業を支える重要な水産資源となっています。被災地をはじめ、日本のサケ資源のほとんどは人工ふ化放流により維持されていることから、来春の放流ができなくなった場合、その後のサケ資源は大きく減少することが懸念されます。

そこで私たち北海道区水産研究所は、水産庁、県、増殖団体との連携の下に、被災した東北区水産研究所とともに3月からさけますふ化放流事業の復興支援策の検討に着手し、その後、水産総合研究センターに「水産業復興・再生のための調査研究開発推進本部」が設置されたと同時に、「現地推進本部」の「さけますふ化放流チーム」として復興支援活動を開始しています。

まず、被害の大きかった岩手県と宮城県に赴き、5月10～20日に東北区水産研究所や日本海区水産研究所のさ

けます調査普及グループとともに、ふ化施設の被災状況を調査しました。現状を詳細に把握し、今後どのような応急処置を実施することで、どの程度の数の放流が実施可能かを見極めることが目的です。これらの調査結果は、サケふ化場の復旧を目的とした水産庁の第一次補正予算事業に活用していただけるよう、5月30日に宮城県、6月1日に岩手県及びさけます増殖団体へ報告しました。

また、サケ卵及び稚魚の飼育においては、水温変化が少なく清澄な地下水の確保が肝要ですが、地震の影響による地盤沈下や津波による海水の混入などで、地下水の水質や汲み上げ用の井戸への影響が懸念されます。そこで、私たちは、効率的に施設の復旧を行えるよう、被災した井戸の能力をパイロット的に調査し、その結果を基に、各県による井戸調査や施設復旧を的確に進めるための助言を行いました。これら調査結果の概要等については、水研センターのホームページをご参照下さい(<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr23/230816-1/index.html>)。

今、ふ化施設の復興支援活動はスタートしたばかりです。来春放流されるサケの稚魚が親となってこの地に戻り、将来の東北地方の本格的な復興につながるよう私たちも引き続き活動していきたいと考えております。



図1 ふ化施設の位置

岩手県で27ふ化場のうち20箇所、宮城県で17ふ化場のうち6箇所が被害が確認された。福島県は立ち入り不可能のため未確認。



写真1 ふ化施設の被害状況

上：津波により鉄骨だけがむき出しになったふ化室(岩手県釜石市の鶴住居ふ化場)。
下：津波により流された橋の欄干に破壊されたコンクリート飼育池(岩手県野田村の下安家ふ化場)。



写真2 井戸能力パイロット調査

専門業者と打ち合わせしながら、塩分等水質のモニタリング調査を実施(宮城県気仙沼市の本吉ふ化場)。